盗賊、竜人の宝物庫でクリに呪いの宝石を嵌められてカントにされ、夜ごと忍び込んで潮を噴き、二つ目を自分で嵌める

R18

2026・10・24

目次

第1話

第2話

第1話

岩の割れ目の前で、燧は靴の裏を石にこすりつけた。泥を落としておかないと、帰りに自分の足跡を踏むことになる。

この奥に竜人の宝物庫がある。古い竜人が宝の山の上で眠りこけていて、灯が消えても起きない。町の飲み屋で、燧はこの冬だけで三度その話を聞いた。盗賊なら聞いた夜に山へ登る。

燧は細長い尾を右の腿に巻き、帯の端で留めた。尾を垂らしていると、床の糸を払ってしまう。

回廊は低かった。割れ目から差す月明かりが、踝の高さの糸を一筋だけ光らせている。燧は腹を岩に沿わせて、糸の下を抜けた。そ

の先の敷石は、踏めば沈む石と沈まない石が混ざっていた。沈まない石だけ角が丸い。燧は爪先から踵へ、体の重さを遅らせて移した。

岩壁に小さな穴が並ぶ所では、先に左の袖を突き出した。穴から針が走り、袖の布だけを縫って引っこむ。燧は鼻で笑って、袖を引きちぎった。

扉のすぐ手前で、回廊の天井が一段高くなった。膝の高さに金色の糸が何本か横に渡してある。月明かりを受けて、細く光っている。燧は膝を上げて、ひとまたぎで越えた。

奥の扉は鉄の錠だった。燧は帯に差してきた道具の布包みを抜いて、膝の横に広げた。細いのから太いのまで針が並び、端に鑿が一本挟まっている。細い針を抜き、丸い耳を錠

に押し当てた。手前の芯は軽く落ちた。奥の芯は浅い所にあって、針の腹で一度戻すとすぐに落ちた。

「開けられない鍵はない」

口の中で言うのは癖だった。扉が指一本ぶんだけ開いた。燧は布包みを巻き直して帯に差し、中へ体を入れた。

宝物庫の奥では、岩の窪みで油の灯が燃えていた。金の杯、銀の皿、口を縛った袋。宝の山は燧の背丈より高い。竜人の姿はなかった。

灯のそばに胸の高さの石の台があり、黒い布の上に紅い宝石が一つ載っていた。糸も金具もない。燧は宝石をつまみ上げた。小指の先より、ひとまわり大きい。中まで紅く、傷

はひとつもない。軽くて小さい石ほど、川向こうの故買屋は高く買う。灯から離しても人の肌くらいの熱が石の中にこもっていた。

「目が覚めちまったな」

声は上から降ってきた。

宝の山のてっぺんに、大きな影が胡座をかいていた。影はゆっくり山を降りてきた。踏まれた金貨が崩れて鳴る。

男は燧より頭二つは大きかった。顔は人の顔で、四十前後に見える。額から二本の角が後ろへ反り、口の端から牙がのぞいている。衣の裾から出た太い尾が、床をずるりと這った。

瑛嗣。町ではこの宝物庫の竜人をそう呼んでいた。

「その石、なんなんだよ。台から離しても熱いぞ」

「いい石だろう。盗むならそれだと思ってた」

「は？　狙われんの分かってて置いてたのかよ。こんなとこに一個だけ載せて、罠のつもりか。……寝てるって聞いたぞ。灯が消えても起きねえって、町じゃ誰でも言ってる」

「寝てたさ。お前が糸の下をくぐったあたりで、目が開いた。沈む石の所で、足を遅らせたろう。久しぶりにあの石が一つも鳴らなかった」

「聞いてたんなら、なんで止めねえんだよ」

「止めたら扉まで来ない」

「来させてどうすんだよ。宝を抱えて寝てるくせに、盗人を奥まで通してやる馬鹿がいる

か」

「ここ何十年も誰も来なかった。来るのは猿くらいだ。猿は糸をまたいで入ってきても、沈む石で逃げ帰る」

「猿と一緒にすんな。こっちは盗賊だぞ。町の蔵ならどこの錠だって一晩で開けてきたんだ」

「町の蔵の錠は軽い。ここの錠は、俺が自分で打った」

　瑛嗣の息が少し荒かった。灯の下で、衣の前が張っている。燧はそれを見なかったことにして、扉までの間を目で測った。

「なあ、竜。ついでに教えといてやるよ。お前の扉の錠な、油はまめに差してんだろうが、奥の芯が浅えんだ。針の腹で押しゃ、一

度戻すだけで落ちる。表の糸だって、月が出てる夜は光って丸見えだぞ。張るなら月の入らねえ奥に張れ。沈む石も乗っていい石だけ角が減ってる。あれじゃ、踏んでいい石に印つけてるのと同じだ」

喋っているあいだは、相手の目が口に来る。燧は足の裏で床を探っていた。

「奥の芯はどのくらい浅い。月の入らない奥ってのは、どこだ」

瑛嗣が一歩近づいた。燧が思っていたより、ずっと食いついた顔だった。

「教えるかよ。てめえの罠の直し方なんか、ただで喋ってたまるか」

言い捨てて、燧は宝の山に沿って横へ滑った。太い尾が床を払いにくる。燧は跳んで越

えた。瑛嗣が短く笑った。尾が今度は反対側から来て、踝に巻きついた。燧は前へ倒れて肘を打った。宝石だけは放さなかった。

　起き上がりざまに、燧は宝の山から金の皿をひっつかんだ。振り上げた右の手首を、瑛嗣の左手があっさり捕まえた。

「手首は商売道具だぞ。折ったら弁償しろ」

「その皿で殴るなら、角はよけてくれ。欠ける」

「わかったよ、返しゃいいんだろ。台に戻して、帰ってやるよ。袖の分は貸しにしといてやる」

「返さなくていい。盗った物は持って帰れ」

「くれんのか、これ。だったら手ぇ離せ。ありがたくもらって、さっさと降りてやる」

「やる。ここの物は置き場がちゃんと決まってる」

瑛嗣は燧を引き寄せたまま床に腰を落とし、胡座の上に座らせた。燧の背中が厚い胸にぶつかる。腰に硬いものが当たっていた。

瑛嗣の右手が、燧の拳をこじ開けた。宝石が太い指につままれる。

「何すんだ。離せ、竜。くれるもんを取り上げんのは、盗人よりたちが悪いぞ」

瑛嗣は宝石をつまんだまま、同じ手の指を燧の帯の結び目に掛けて引いた。結び目がほどけ、腿に巻いていた尾が床に落ちる。燧は膝を閉じた。そのあいだへ、瑛嗣の太い尾が割りこんできた。尾は膝を内側から押して、左右へ大きく開かせた。

衣の前がはだけ、下帯一枚の股が灯の下に出た。

瑛嗣が皿を持った燧の右手首をひねった。磨いた金の皿が、燧の腿のあいだで上を向く。そうしておいて、瑛嗣は手首を放した。

皿を放り出せばよかった。燧は放り出さなかった。顔を下へ向けようとすると、瑛嗣の顎が頭の上から押さえてくる。見えるのは腿のあいだの皿だけだ。皿の金には下から見上げた股が赤っぽく歪んで映っている。何をされるのか、見ておかないと分からない。燧は皿の縁を、両手で握り直した。

空いた左手が下帯の脇から入って、燧のちんぽを外へ出した。

「てめえ、どこ触ってやがる。男のちんぽなんか引っぱり出したって、故買屋は一文も出さねえぞ。おい、聞いてんのか」

石がちんぽの根元に押し当てられた。

火に当てた石を置かれたような熱さだった。燧は腰を引いたが、後ろには瑛嗣の腹しかない。

「っ……く、う」

皿の中で、燧のちんぽが細くなっていく。先のほうから腹の皮に吸いこまれるように縮んでいく。

「なんだよ、これ。おい、戻せ。戻せって言ってんだろ。縮んでんじゃねえか、俺の……おい、竜、てめえ、何しやがった」

戻らなかった。ちんぽは皮の下に消え、金玉の袋もしぼんで平たい皮になった。皿には毛の薄い平らな股だけが映っていた。燧は皿を落としかけて、また握った。指が震えて、映っている股も一緒に揺れた。皿の縁に、汗の滴がひとつ落ちて、金の上で丸く光った。

「俺の、ちんぽ……どこやった。金玉もねえ。ねえぞ、おい。返せよ。石なんかくれてやるから、こっち返せ」

瑛嗣は宝石を、平らな皮の上で少しずらした。

皮が縦に裂けた。痛みは短く、あとから腹の奥まで続く熱が来た。裂け目の縁がめくれ、濡れた肉が灯に光る。てっぺんに小さな肉の粒が顔を出していた。

「ん゛っ……なんだよ、この穴……ふざけんな、女の、みてえな……」

皿の中で、毛の陰の縦の割れ目がひくひく動いている。まんこだ。てっぺんの粒はクリだ。女のそこなら、燧も知っている。それが今、自分の股にできていた。

左の指が、裂け目の両側に添えられた。太い指が肉を左右へ開く。皿の中で、濡れた襞が重なり、奥に小さな穴が口を閉じているのが見えた。

「開くな、てめえ。俺の股だぞ。値踏みすんなら、手ぇ離してからにしろ。俺のもんを、好きにいじくり回すんじゃねえ」

瑛嗣の指先が穴の口をなぞった。入れはしない。縁を一周しただけで、燧の腹がびくっ

と縮んだ。

「罠を全部くぐってきた体だ。腰が細い。糸の下を抜けるとき、この腰がどう曲がったか、ここで音を聞いてた」

「気色悪いこと言ってんじゃねえ。人の腰の音なんか聞いてんなよ」

「石を持って帰るなら、ここに嵌めていけ。台に載せとくより、ずっといい」

「いいわけあるか。人の股を台がわりにすんじゃねえよ。……おい、待て、そっちに持ってくな。やめろって」

　瑛嗣が宝石をそのクリに押し当てた。

「ひ、っ」

　石がクリに沈んでいく。皮が石の縁を噛み、表だけを外に残して閉じた。紅い宝石が

クリの真ん中に嵌まっている。燧は爪でつまもうとした。石と皮の境目がどこにもなかった。

「カントじゃねえか、これ。飲み屋で聞いたことあるぞ。顔も胸も男のまんまで、股だけ女のつくりになってるって……与太話だと思って笑ってたんだよ、俺は」

　皿の中にそのカントが映っていた。胸は平たい。腕も腿もさっきまでの自分のままだ。股だけが別の体だった。

「冗談じゃねえぞ。こんな股で、どうやって仕事すんだよ。屋根に登るのも、塀を越えんのも、いちいち股が擦れんじゃねえか」

「擦れるたびにこの山を思い出せ。……外れないぞ。爪でも刃でもな」

耳に息がかかった。その途端、クリが跳ねた。宝石が熱を持ち、まんこの奥がきゅっと縮む。裂け目からまん汁がとろりとこぼれて皿の縁に落ちた。

「てめえ、今、何した。何もしてねえのに、なんで……」

「喋っただけだ。そいつは呪いの宝石だ」

「ふざけんな。外せ。今すぐ外して、元に戻せ。戻さねえと、この山の宝、片っ端から町にばらまいてやるからな」

「回廊の罠は全部俺が張った。糸の高さも、石の並びも、針の穴もだ。それをお前は灯も持たずに抜けてきた」

瑛嗣は燧の耳に口を寄せたまま、ゆっくり喋った。一言ごとに宝石がどくんと熱を打

つ。燧は首をすくめ、丸い耳を肩に押しつけた。それでも、低い声は肩と耳のすきまから入ってくる。

「黙れ。喋んな。てめえが口開くたびに、こっちは……くそ、わざとやってんだろ」

「猿は糸をまたぐだけで、くぐりもしない。腹を床に付けて抜けていったのは、お前だけだ」

　燧の腰がよじれた。濡れた縁が下帯の布に擦れる。燧は金の皿を床に叩きつけた。皿は金貨の上を転がって、宝の山の裾で止まった。

「皿はへこんでもいい。叩きつけた手首が痛まなければな」

瑛嗣の息がさっきより荒い。腰に当たっている硬いものが、衣越しにびくりと動いた。瑛嗣は燧の右手を指ごと握りこみ、後ろへ回させて、自分の衣の合わせの中へ入れた。

熱い肉が掌にぶつかった。

「巾着抜きの指だぞ。ただで使う気か」

「石を一つやった。それで足りないか」

「足りるか。あんなもん、股にくっついてちゃ一文にもならねえ」

竜人のちんぽは、燧の指が回りきらないほど太かった。重く、皮の下で脈を打っている。抜こうとした手を、瑛嗣の手が上から覆って離さない。

こいつを出させれば終わる、と燧は思った。出せば萎える。萎えれば手も緩む。

「……出しゃいいんだな。出したら離せよ。離して、これも外せ。男なんだから出したら気が済むだろ。済んだら、俺の股を元に戻せ」

どうせやるならいちばん速い指でやる。燧は人の袖から巾着を抜くときの運びを使った。根元に指を沿わせ、相手が気づく前に先まで一息で滑らせる。親指は先の割れ目をかすめて離れる。何百回とやってきた指の運びを、竜のちんぽの上でやった。

「巾着でも抜く気か、盗人」

「抜けるもんなら抜いてやりてえよ。根っこから引っこ抜いて、てめえの宝の山のてっぺんに突き刺してやる」

瑛嗣の息が掠れた。燧の背中で、厚い胸が大きく上下する。耳の後ろで、喉の奥から短

い唸りが漏れる。そのたびにクリが疼いた。先の割れ目からぬるりとしたものがあふれて燧の指を濡らした。

「でけえだけで、出んのはすぐだろ。ほら、出せよ。さっさと出して、萎えちまえ。こっちは手が疲れんだよ。竜のちんぽなんか、握ったことねえんだからな。出したら、俺は帰る。帰って、この石ほじくり出して、川向こうで売っ払ってやる」

「もう少しゆっくりやれ。すぐ出したらもったいない」

「誰がゆっくりやるか。てめえの楽しみに付き合ってやる気はねえ。……おい、腰、押しつけてくんな。手の中で跳ねんなって」

濡れた皮が、くちゅ、くちゅと鳴った。瑛嗣の腰が、燧の掌に押しつけるように前へ出る。

瑛嗣が、燧の手を引きはがした。

「おい、出させりゃ離すんじゃなかったのかよ。まだ出てねえぞ」

「手じゃ足りない。出すならこっちだ」

燧は床に倒された。開かれた膝のあいだに、瑛嗣が膝をつく。衣の合わせから出たちんぽは、灯の下で見ると握った手ざわりよりさらに大きかった。先が赤黒く張って、燧の握った跡がぬらぬら光っている。

「おい、待て。それ、どうする気だ。やめろ、そんなもん。俺の股はさっきできたばっかりなんだぞ」

瑛嗣は入れなかった。

ちんぽの先を、まんこの裂け目に当てた。縁を割らずに上へ滑らせる。濡れた肉と肉がこすれて、ぬちっと鳴った。先はそのまま上がって、クリの宝石にぶつかった。

「あ゛っ、や゛、め……そこ、石、当て、んな」

瑛嗣は腰を引き、またまんこの下から宝石まで擦り上げた。擦るたびに宝石が先の割れ目に当たってかちりと鳴る。瑛嗣の左手が燧の腰骨をつかんで床から浮かせ、右手は自分のちんぽの根を握って、先を股に押しつけている。燧の両手は床を掻いた。

「い゛っ、ぁ……て、めえ、そこ、ばっか、こす、んな」

「俺の張った罠より、たちが悪いな」

「この、ど助平の、竜……っ、山奥で、何十年、溜めて、やがった」

「何十年かは溜めたな。今夜まで溜めておいて、よかった」

まんこの縁がちんぽの裏筋に吸いつく。離れるときに、ちゅぷ、と鳴る。穴の口がひくついて、奥からまん汁が押し出される。

腹の下が上へ上へと引き上げられる。燧はその先を知っていた。男の体で何度も越えてきた所だ。来ればこの熱は抜ける。

瑛嗣の腰が速くなった。まん汁と先走りが混ざって、腿の付け根に糸を引く。重い金玉が、燧の尻の下で揺れて当たった。ぺち、ぺち、と尻の肉が鳴る。

「て、めえの、金玉まで、当たって、ん、だよ……っ」

「鼬、股を開いてろ。石に掛ける」

　瑛嗣の声で、また石が跳ねた。

　熱いザーメンが股に叩きつけられた。最初の一撃が宝石を打って、裂け目の縁を伝い落ちた。次が下腹に、その次はへその上まで飛んだ。瑛嗣は低く唸りながら、燧の腰を押さえて最後まで出し切った。

　燧の腰は上がりきる手前で止まっていた。

　瑛嗣のちんぽが股から離れていく。

「や゛、め、ん……な、ぁ」

　自分が何を言ったのか、燧には分からなかった。てっぺんの手前に引っかかったまま、

クリが脈を打ち続ける。ザーメンに濡れた石が、まだ熱い。

「て、めえ……ひと、りで……出し、やがって……っ」

燧の腿が開いたり閉じたりした。閉じるたびに股に溜まったザーメンがぬるりと寄って、まんこの縁に触れた。

瑛嗣は膝立ちのまま、燧の股を見下ろしていた。

「台に戻すのはやめだ」

「見物料、取るぞ……拭け、この……拭けよ」

瑛嗣は拭かなかった。指先でへその上のザーメンをすくって、燧の下腹に塗り広げた。

瑛嗣は衣の前を合わせて立ち上がった。燧が床に倒れたときに帯からこぼれた布包みを

拾い、散った針を拾い集めて中へ戻すと、燧の胸の上に置いた。

　燧はどうにか起き上がって、衣を合わせた。下帯をまんこの上に戻すと、布が宝石に触れて腰が抜けそうになった。

「くそ、当たる……下帯が、石に当たんだよ。こんなんで、山なんか降りられるか」

「降りられるさ。来た道を、自分の足で戻れ」

「おい。なんで帰すんだよ。盗賊捕まえといて、町の役人にも突き出さねえのか」

「突き出したらもう来ない。役人の牢は、お前なら三日で抜ける。抜けたら町を出る。それじゃ困る」

「三日もかかるかよ。一晩で抜けるわ」

「なら、なおさら突き出さない」

「来るわけねえだろ。こんな体にしやがって。二度とこの山の匂いも嗅ぎたかねえよ。町に降りたら鍛冶屋で金槌と鉄の楔でも借りて、こんな石、根っこから割ってやる」

「割れたら持ってこい。台に戻す」

「誰が持ってくるか。割ったらかけらまで川に捨ててやる。次にこの山に来るとしたら、てめえのその角をへし折りに来るときだからな」

「来るならまた糸の下をくぐってこい。上をまたぐなよ」

　瑛嗣は宝の山の裾に腰を下ろし、転がった金の皿を袖で拭きはじめた。

「疼いたら、また盗みに来い」

燧は耳を伏せた。何を言っても石が熱くなるだけだ。

帰りの回廊は来たときと同じ道とは思えなかった。

扉の外の金色の糸は、膝が上がらず、腿を手で持ち上げてまたいだ。針の穴の前では袖を出すのを忘れた。右の袖が縫われて、腕の皮を針がかすめた。沈む石の所では膝を折った。爪先で体の重さを移そうとすると、腿が締まって宝石を挟んでしまう。手をついた石が沈みかけ、慌てて隣へ移った。

踝の糸をくぐるのに、腹を床に付けた。下帯ごしに宝石が石の床に押しつけられる。燧は声を噛んで、肘で前へ進んだ。進むたびにまんこの縁が布の中でこすれて、ぬるぬると滑った。

腹の上でザーメンが乾きかけて、歩くたびに衣の内側に貼りついては剥がれた。竜の匂いが自分の体から立ちのぼってくる。下帯の前はまん汁を吸って重くなっていた。

町の端の隠れ家に着くと、燧は雨戸を閉め、かんぬきを落とした。灯を一つだけつけ、布包みを壁ぎわに置く。

燧は衣も下帯も脱ぎ捨てて、部屋の隅の水盆の上にしゃがんだ。

水面に自分の股が映っていた。ちんぽも金玉もない。毛の下に縦の裂け目があって、てっぺんで紅い宝石が光っている。乾きかけた竜の汁が、裂け目の周りに白くこびりついていた。

水を掬って股にかけた。冷たい。ザーメンは重く、水をかけただけでは落ちない。指でこそげると、ザーメンはぬるりとほどけて、まんこの縁を滑っていく。指先が裂け目の内側に入りかけた。慌てて引いた指が、クリに当たった。

「っ」

石は水の中でも熱かった。爪を立てようにも縁がない。つまんで引くと、クリの根元が引っぱられて痛んだ。

燧は腰を落として、股を水盆の水に沈めた。冷たさが裂け目に入りこみ、まんこの縁がきゅっと縮む。水の中で、紅い宝石だけが熱い。熱い石のまわりで、水面に小さな輪が広がった。腰を浮かせると、股から水が糸を引いて落ちる。沈めると、また石だけが熱を

返す。水盆の水が白く濁っていった。燧は濁った水を両手で掬い、もう一度、股に浴びせた。

燧は濡れた体のまま、布団に転がった。

右手を股に下ろし、中指でクリの脇を押す。宝石が熱を返し、腰が浮いた。自分の指ならどこを触ればいいかぐらい分かる。中指を宝石の横で回すと、まんこの縁からまん汁がにじんでくる。それをすくってクリに塗りつけると、腰の奥が締まった。

「っ、く……ん、ぅ……」

上がっていく。さっきと同じ所まで来る。

そこで止まった。

指を速めても、強く押しても、てっぺんの手前から先へ行かない。燧は左手で布団を握

り、宝石ごとクリを押し潰した。腰が浮いて、尾が床板を叩く。

燧は指を、まんこの中へ一本入れてみた。浅い所で、肉がぎゅっと指を噛む。親指で宝石を押さえたまま、中の指を出し入れする。くちゅ、くちゅと、自分の股から聞いたこともない音がした。

燧は指をもう一本足した。中指と薬指で、浅い所の上側をこする。そこをこすると、宝石の裏まで響いた。指を動かすたびに、まん汁が掌に溜まって、手首へ垂れていく。燧は腰を突き上げて、指に股を押しつけた。

不意に耳の奥で声がした。

――来るならまた糸の下をくぐってこい。

宝石が指の下でかっと熱くなった。まんこが指を締めつけ、腰が跳ねた。思い出しただけで、さっきよりずっと上まで行った。

それでも、越えなかった。

「くそ……なんでだよ」

燧は指を抜いた。指はまん汁で手首まで濡れていた。閉じれば腿の肉が宝石を挟む。挟めばまた疼く。燧は膝を立てたまま、布団の上で動けなかった。

雨戸の隙間が黒から灰色に変わっていった。燧は一度も目を閉じなかった。

股は朝になっても脈を打っていた。明るくなると、燧は布団から這い出た。布包みをほどき、針の列の端から鑿を抜く。錠の芯を削るための、刃の細い鑿だ。

燧はそれを、枕の横に置いた。

第2話

昼になっても、燧は雨戸を開けなかった。

布団の上にあぐらをかき、枕の横の鑿を取った。石と肉の境目が見えなくても、刃の先なら入る。燧はそう踏んだ。

刃の先を、紅い宝石の縁に当てた。

冷たい。鉄の冷たさがクリの根元に伝わって、腰がひくっと跳ねた。刃先が滑り、宝石の表をかすめて、クリの脇の肉をこすった。

「ふ、ぅ……っ」

切れてはいない。刃の腹が当たっただけで、まんこの奥がきゅうっと縮んだ。燧は鑿を握り直して、もう一度、刃を石の縁へ押しあてた。

入らない。力を足すと、刃は石の丸みに沿って滑り、またクリの脇をこすっていく。冷たい鉄が肉を撫でるたびに、裂け目からまん汁がにじんで、柄を握る指まで濡れてきた。

燧は手を止めた。

錠の芯ならどこを削れば落ちるか分かる。呪いの宝石にはそれが一つもなかった。腕の立つ盗賊が雨戸を閉めた部屋で、自分の股を鑿の腹にすりつけている。

燧は鑿を布で拭いて、道具の包みに戻した。

その晩、燧は下帯をいつもよりきつく締めて布団に入った。布が宝石を押さえていれば、少しはましだと思った。

仰向けでは眠れなかった。うつ伏せになると、布団に押されて石が潰れる。少し楽だ。眠りかけて、燧は自分の腰の動きで目を覚ました。尻が上下して、股を布団にこすりつけている。下帯の前は布団の綿まで湿るほど濡れていた。

燧は止めなかった。こすりつけるたびに、石が布団の中でぐりぐりと転がる。いつもの所まで上がって、そこで止まる。燧は布団の端を握りしめて、尻を振り続けた。

夜中に何度も目を覚まし、そのたびに股の布が濡れていた。明け方には帯の端を噛んで声をこらえていた。

次の日が暮れると、燧は道具の包みを腰に巻いた。鑿も包みの中に入っている。

外れないのならあの竜に外させればいい。山へ向かう理由なら、それで足りた。

山道は暗かった。歩くたびに下帯の布が宝石を擦る。坂の途中で、燧は木の幹に手をついて止まった。止まっても股の脈は引かない。燧はまた足を出した。

燧は尾を腿に巻いて帯で留め、岩の割れ目に体を入れた。回廊の入り口で、足を止める。

踝の高さに糸が光っていない。

燧は腹ばいになって、床すれすれに目を寄せた。糸は月明かりの入らない奥へ下がって、低く張り直してあった。

月の入らねえ奥に張れ。燧があの晩、竜にそう言った。そのとおりにしてある。

燧は奥歯を噛んで、糸の下に腹を沈めた。床が近い。胸と腹を石に付けると、下帯の上から宝石が床に押しつけられた。腰を浮かせれば糸に触れる。燧は腰を床に付けたまま、肘で前へ進んだ。進むたびに石の床が股をこする。糸を抜けきったときには、下帯の前がぐっしょり重くなっていた。下帯の上から押さえた手のひらが、じっとりと湿った。

沈む石の並びも変わっていた。角の丸い石がもうない。燧は爪先で縁を叩き、返ってくる音を聞いて、沈まない石を拾った。

針の穴の前で袖を出すと、袖を縫った針のあとから、もう一本が腕の高さを走った。燧は肘を引いて、それをかわした。

扉の手前、天井の高い所の金色の糸は、前と同じに膝の高さで張ってあった。燧は膝を

上げて、大きくまたいだ。

扉の錠も奥の芯が深くなっていた。

燧は耳を錠に当てて、針を送った。芯を探る指先がまん汁で少しぬめっている。奥の芯は前より指一関節ぶん深い所にあった。細くて長い針に替えて、芯の腹を押す。かすかに鳴った。

開けちまった、と燧は思った。

「芯は深くしておいた。どうだった」

扉の向こうから低い声がした。宝石が下帯の中でかっと熱を持ち、燧は錠に額を付けたまま動けなくなった。

「どうもこうもねえよ……っ、扉越しに、喋んな。開けたんだから黙って通せ」

膝をついた股の下で、濡れた下帯がじわりと冷えていく。腰を引こうとすると、布が石をこすった。燧は扉に額を押しつけたまま、尻だけを小さく揺らして、熱が引くのを待った。引かなかった。

竜人の宝物庫の奥では、油の灯が燃えていた。瑛嗣はもう、宝の山の裾に戻って座っていた。燧が入ってくると、顔だけをこちらへ向けた。

「糸を下げたのにくぐってきたな、鼬」

「てめえ、俺が言ったとおりに直しやがったな。人の口で罠張り直してんじゃねえよ。おかげで腹が床に……」

燧の耳がぺたりと伏せた。瑛嗣は嬉しそうに尾を揺らした。それから、燧の腰の布包み

に目を落とした。包みの端から鑿の柄がのぞいている。

　瑛嗣の顔から笑いが引いた。

「それで外して、置いていく気か」

「あ？」

「刃を持ってきたんなら、そういうことだろう。ここで外して台に戻して、それで終いにする。もう山には登らない」

「何言ってんだ、てめえ」

「台は空けてある。布も掛け直した。置いていくなら、そこだ」

　瑛嗣は顎で、灯のそばの台を指した。黒い布が皺ひとつなく掛け直してある。

「おい、一人で話進めてんじゃねえよ。誰が終いにするって言った」

「その鑿が言ってる。わざわざ刃を持って罠を全部抜けて、扉まで開けて来たんだ。外して置いていく以外に、何がある。外せるならここでやってみろ。止めはしない」

　瑛嗣はそう言って、宝の山の裾から動かなかった。尾も床の上で丸まったままだ。

「てめえが外せって言ってんだよ。外さねえならこの山の錠、全部開けっぱなしにして帰るぞ。山の獣でも何でも入り放題だ」

「外れない。外したいなら自分でやれ」

「ああ、やってやるよ。見てろよ、竜。盗賊の鑿でこんな石、根っこからほじくり出してやる。ほじくり出したら、てめえの面に投げつけて帰るからな」

瑛嗣は座ったまま、燧の手元だけを見ていた。

燧は台の前の床に腰を落とした。背を台の脚にあずけ、衣の前をはだける。下帯を横へずらすと、濡れた布が裂け目から糸を引いて離れた。燧は鑿を抜いた。

瑛嗣が見ている。灯の向こうから、燧の股を見ている。

燧は膝を開き、鑿の刃の腹を宝石の根元に当てた。昼間と同じ冷たさが来る。

「くそ、冷てえ……っ、ふ……」

刃の角を、石と肉の境目に立てようとした。立たない。滑る。刃の腹がクリの脇をこすり、宝石の表を撫でて、また根元へ戻って

くる。燧の手は震えていた。震えるたびに冷たい鉄がクリの上で小刻みに揺れる。

裂け目からまん汁が垂れた。尻の下の石に落ちて、ぴちゃりと鳴った。

「じろじろ見んなら、値ぇ付けてからにしろ。こんなもん、すぐ……っ、すぐ外れる。刃の角さえ立ちゃこっちのもんだ。……なんか言えよ。黙って見てられるとやりにくいだろうが」

喋っていないと、股の音ばかり耳に入る。燧は刃の角度を変えた。また滑った。

瑛嗣の目が股に来ているのが、肌で分かる。分かるたびにクリが脈を打った。

燧は刃をもう一度立てた。手首に力を入れる。刃がまた滑った。今度は刃の腹がまんこ

の縁まで落ちて、濡れた肉を下から上へ撫で上げた。

「う゛、ぁ……っ」

腰が台の脚から浮いた。鑿が床に落ちて、甲高い音を立てた。

「……できるかよ、こんなの」

燧は落ちた鑿を拾わなかった。膝を立てたまま、股を開いたまま、瑛嗣のほうを睨んだ。

「おとといの晩、ここへ盗みに入ったろ。あれから、ろくに寝てねえんだよ。目つぶったら、てめえの声が耳の奥でしやがる。水かけても指でいじっても、これが熱いままなんだ。昨日は昼からこの鑿でずっとこすってた。昨夜は帯噛んで朝まで我慢した。今日は

もう、昼から何も手につかねえ。外れねえし、余計に濡れる。何やってんのか分かんなくなって……それで来たんだよ。外させにな。返しに来たんじゃねえ」

　瑛嗣が立ち上がった。宝の山の裾から、金貨を蹴散らして、まっすぐ燧のほうへ来た。さっきまで丸まっていた尾が、床の上で大きくうねっている。

「……返しに来たんじゃ、ないのか」

「来るとか来ねえとかの話じゃねえよ。この石、てめえの手で外させるっつってんだ。……それと、その鼬ってのやめろ。燧だ」

　瑛嗣は燧の前に膝をついた。灯が遮られて、燧の上に大きな影が落ちる。瑛嗣の息が荒い。衣の前がまた張っていた。

「燧」

宝石が跳ねた。名前を呼ばれただけで、まんこの奥がぎゅっと縮んだ。

「呼ぶな。名前も喋ってんのと一緒だろうが……っ」

燧は両手で耳を塞いだ。

耳を塞ぐと、声はくぐもって遠くなった。

そのかわり、股の上に手がない。膝は開いたままで、下帯は横へずれたままだ。濡れた裂け目と、てっぺんの紅い石が、灯の下に出ている。

瑛嗣は燧に触れていない。燧の前に膝をついたまま、話しはじめた。

「回廊の糸は昨日の昼に下げた。お前の言ったとおり、月の入らない所にな。石の角は全

部同じに削った。錠は奥の芯を一関節ぶん深くした。お前が来なかったら無駄になるところだった」

塞いだ手のひら越しでも、一言ごとに石が熱くなる。耳の奥まで、低い声が染みてくる。燧の腰がひくついた。裂け目がひくひく開いては閉じて、まん汁が床へ垂れていく。

燧は右手を耳から外して、股の上にかぶせた。

右の耳から声がまっすぐ入った。

「針の穴も一つ足した。腕の高さにな。かわしたろう。肘を引く音がした」

「う、ぁ……っ、く……てめえ、それ、わざと、喋ってん、だろ。罠の話なんか、どうでも、いいんだよ」

「どうでもよくない。お前のために張り直した。次は沈む石の音も変える。爪先で叩いても分からないようにな」

　掌の下で、宝石が跳ねた。押さえた手のひらに、クリの脈がじかに伝わってくる。押さえるほど、石が掌に食いこむ。燧は手を股から浮かせた。浮かせると、また裂け目が灯にさらされる。耳に戻せば、股が空く。

「どっちか選べって顔してんじゃねえよ。耳か股か、なんて……どっち押さえても熱いんだよ、こっちは」

「選ばなくていい。どっちでも俺は喋る。お前が来る夜のために、喋ることなら山ほど溜めてある」

　燧は左手も耳から外した。

両手で、瑛嗣の衣の襟をつかんだ。

「どうせ喋んなら、耳じゃなくてこっちで払え。罠の話なんか、一文にもなりゃしねえ。こっちは耳ふさいだって、股のほうが……くそ、もういい。さっさとしろ」

燧は襟を下へ引いた。瑛嗣の顔が、燧の股の上まで引き下ろされた。

瑛嗣の両手が、燧の両腿の内側にかかった。太い指が肉をつかみ、腿を左右へ押し開く。親指が裂け目の両脇に添えられ、まんこの縁をくぱりと開いた。

宝石のすぐ上で、名前を呼ばれた。熱い息が濡れた肉に吹きかかる。

「ひぁ゛っ」

石が焼けるように熱くなった。燧は瑛嗣の襟を握ったまま、腰を浮かせた。浮いた腰を、太い腕が腿ごと床に押し戻す。息がまた来る。吐息が、ゆっくりクリの上を往復した。

「は、ぁ、あ゛……っ、声、よこせ、っ……」

瑛嗣は喋らなかった。

かわりに、舌の腹が宝石を舐め上げた。

熱く、ざらりとした舌だった。硬い石の上を舌が通り、石のまわりの肉までまとめて舐め取っていく。押さえられた腿が跳ねた。

「お゛っ、ぉ……お゛、石、の、まわり、舐め、んな、ぁ」

舌は宝石のまわりを回った。石の縁と肉の境目を、刃では入らなかった所を、舌先がな

ぞる。

「刃が入らなかったのは、ここか。お前の鑿の跡が少し赤くなってる」

「っ、舐めて、ごまかす、な……ほじった、のは、俺だ……」

境目がないはずの所を、舌はしつこく探った。探られるたびにクリの根元がしびれて、腰の奥が引きつった。

瑛嗣の唇がクリを宝石ごと含んだ。

吸われた。

クリが根元から引っぱられ、口の中で石と一緒に転がされる。燧の背中が台の脚から浮き、後ろ頭が台の石にぶつかった。

「い゛っ、ぅ、う゛……吸、う、な……ぁ、あ゛」

瑛嗣の右手が腿を離れて、中指の腹がまんこの穴の口を押さえた。入れはしない。押さえたまま、唇でクリを吸い上げる。吸うたびに指の下で穴がぱくぱく動いた。

燧の手が、瑛嗣の襟から髪に移った。押しのけるつもりでつかんだ髪を、燧は自分の股のほうへ引いた。

腹の底から、熱がせり上がってくる。いつも止まる所まで来た。そこで止まると思った。

止まらなかった。

瑛嗣が強く吸った。宝石が歯に当たり、かちりと鳴る。

「て、め……っ、ぇ、え゛、っ……！」

股の奥から熱いものが噴き出した。

一度では止まらなかった。まんこの穴からぴゅっ、ぴゅっと続けて噴き、瑛嗣の顎と喉を濡らした。瑛嗣は口を離さなかった。吸いながら、噴いたものを顎で受けている。燧の腰はがくがくと揺れて、そのたびにまた少し噴いた。床に落ちた水が尻の下まで広がっていく。

男の体だったころ、こんなものが出たことはない。小便とも違う、さらさらした水が、まだ腿を伝っている。

燧は瑛嗣の髪をつかんだまま、喉をそらしていた。声が出ない。口だけがぱくぱく動いた。

瑛嗣が口を離した。顎まで濡れたのを、舌で舐め取った。

それから、燧の右の腿に顔を寄せた。

腿の内側に噴いたものが筋になって流れている。瑛嗣の舌がその筋を、膝のほうから股の付け根へ向かって舐め上げた。ざらついた舌が汗ばんだ肌をこする。付け根まで来ると、今度は左の腿へ移って、同じように膝から舐め上げてくる。

「やめ、ろ……そんなとこ、舐めんな」

「床に吸わせたら、宝物庫が湿気る」

「湿気るって、なんだよ。人の股から出たもんまで溜めこむ気か。蔵の鼠でもそこまでしねえぞ」

「鼠はここまで入ってこない。お前は入ってきた」

瑛嗣はやめなかった。両手で燧の膝裏をすくい上げ、腿を胸のほうへ押しつける。尻が床から浮いて、まんこが上を向いた。瑛嗣の舌が尻の割れ目に溜まった水まですくい取っていく。

「っ、尻まで、舐め、んな……そこは、通り道じゃ、ねえ……っ」舐め取るたびに、瑛嗣が飲み下す音がした。

「は、ぁ……っ、う、ぁ」

燧は自分の膝を見上げていた。その向こうに、竜の角と、自分の股に埋まった顔がある。

「いつまで、舐めて、んだよ……っ、もう、ねえだろ、なんにも」

「もう少しだ。床板が腐る」

「漏らしたのかよ、俺」

「潮だ。しょっぱいな」

「顔拭いてから喋れよ。そんなべちゃべちゃの顔で、真面目に言うな。知らねえよ、潮なんて。男のときはこんなの一度も出たことねえんだぞ。股から水みてえなのが、びゅって。てめえの顔にかかって……」

燧は顔をそむけた。耳まで熱かった。瑛嗣は何も言わずに、燧の腿に残った筋をもう一度舐め上げた。

「まあいい。顔はこのままにしておく」

「次にそれ言ったら、その角を川向こうで売っ払うぞ」

瑛嗣の声が届いても、さっきほど石は跳ねなかった。腹の底の詰まりが、少しだけ抜け

ていた。

瑛嗣の両手が、燧の腰をつかんだ。

体が浮いて、尻が冷たい布の上に載せられた。灯のそばの台の、紅い宝石が載っていた黒い布の上だ。

「おい、何すんだ。降ろせ。こんなとこ座らせて、どうする気だ」

瑛嗣は燧の両膝をつかんで、左右へ開いた。片手ずつ膝の内側を押さえる。台に座らされると、開いた股がちょうど瑛嗣の胸の前に来た。灯が正面から当たって、開いた股をまるごと照らしている。

燧は膝を閉じようとした。瑛嗣の手が膝を押さえて、閉じさせない。

「離せって。灯が当たってんだよ、まともに。宝の台に盗人座らせるなら、せめて灯は脇から当てろ。正面からじゃ目利きもできねえだろうが。……おい、聞いてんのか、竜」

「目利きなら、俺がする」

瑛嗣は膝を押さえたまま、片手を伸ばして油の灯を台の脇へずらした。灯が横から当たり、開いた股の陰が深くなる。

「……本当に脇にずらしやがった。この助平竜。宝の台に載せられたのなんか、生まれて初めてだぞ。盗むほうが台に載るなんて、どこの故買屋に話しても笑われる」

竜の目は、燧の股から離れない。噴いたばかりのまんこは赤く腫れて、縁がまだひくついていた。まん汁と潮が混ざって、尻の下の

黒い布に染みを広げていく。燧が身じろぐたびに、布がぬちゃりと鳴った。

　衣の前の張りがさっきよりきつい。

　瑛嗣は右手を膝から離した。中指を親指に掛けて、爪の先を宝石の前に構える。

　ちん、と澄んだ音がした。

「ひっ」

　爪で、石をはじかれた。小さな音なのに、石の奥まで響いた。燧の腰が台の上で跳ね、尻の下の布がずれる。

　ちん。

「ぎ、っ……やめ、鳴らすな、そんなもん」

　続けて二度、ちん、ちん。燧の尻が、そのたびに台から浮いた。

はじかれるたびに、石の芯が震える。震えがクリの根元から腹の奥へ抜けて、まんこがきゅっと縮む。縮んだ穴から、とろりと押し出されて布に落ちる。音が鳴るたびに、瑛嗣の口の端が上がった。

「台に載ってたときは、はじいてもこんな音はしなかった」

「は、ひ……ぁ、そんな、こと、聞いて、ねえ……っ、んゞ、鳴らす、な、って」

燧は瑛嗣の右手首をつかんだ。止めようとした。指に力が入らない。つかんだ手首ごと、爪がまた石の前に来る。

「もう一度、鳴らす」

「や、め……っ、鳴らすって、言う、な、言われると、そこが、待っちま……」

ちん。

燧の背中が反った。両手を後ろへついて、台の縁にしがみつく。開いた膝が、瑛嗣の左手の下でがくがく震えた。

瑛嗣が手を止め、燧の膝から左手を離した。燧は台の上で、股を開いたままだった。閉じようと思えば閉じられる。膝は開いたまま、震えていた。燧は唇を噛んだ。瑛嗣の口の端がまた上がった。

大きな手が、燧の腰の下に入ってきた。燧が身をよじる間もなく、横へずれていた下帯がほどかれた。

「おい、何して……」

瑛嗣は燧の腰を抱えて、台から床へ降ろした。濡れた下帯は、瑛嗣の手に残っていた。

前の布はまん汁と潮を吸って重く垂れている。

燧が座っていた黒い布の上に、その下帯が広げて置かれた。

瑛嗣はその皺を指で伸ばし、端を揃えた。一歩下がって眺め、それから満足そうに鼻を鳴らした。

「てめえ、ふざけんな。返せ。それ、俺の下帯だぞ」

「石を一つ持っていかれたからな。台が空いてた」

「持ってったんじゃねえ、嵌められたんだろうが」

「どっちでもいい。これは置いていけ」

「下帯なしで山降りろってのかよ。裾めくれたら丸見えだろうが。風吹いたらどうすんだ」

「風は夜明け前には止む」

「止まなかったら、てめえのその尾を借りる。下帯のかわりに巻いて帰るからな」

燧は跳ね起きて台へ手を伸ばしたが、膝に力が入らず、床にへたりこんだ。股がじかに床の水に触れて、冷たさが裂け目に入った。

瑛嗣は落ちていた鑿を拾い、刃を灯にかざして眺めてから、燧の布包みに差し戻した。包みを燧の膝に置く。

「夜が明ける前に出ろ。明るくなると、回廊の糸が見える。見られたらまた張り直しだ。それと、錠は掛けていけ。開けっぱなしだと猿が入る」

「言われなくても掛けてくよ。開けた錠を戻すのは、てめえのためじゃねえ。足が付くからだ」

燧は布包みを腰に巻き、衣の帯を締めた。下帯のない股に衣の布がじかに触れる。立ち上がると、裾の内側を風が抜けた。

扉の前で振り返ると、黒い布の上で自分の下帯が灯に照らされていた。瑛嗣は台の横に座って、それを見ていた。

「おい、竜。それ、捨てとけよ。飾っとくんじゃねえぞ。誰かに見られたら、俺は町を歩けねえ」

「誰も来ない。見るのは俺だけだ」

「てめえが見んのが、いちばん困んだよ」

扉を外から閉めて、燧は錠の前に膝をついた。

開けた錠は元に戻す。どこの蔵でも、燧はそうしてきた。芯を戻すのは開けるより指先の加減が細かい。

指が滑った。針の頭がまん汁でぬめっている。

「く、そ……っ、指まで、熱い……」燧は指を衣で拭おうとして、衣の前も濡れているのに気づいた。拭いても拭いても、指先に股のぬめりが戻ってくる。

「くそ、針が滑る。股の汁で錠いじってる盗賊なんか、どこにいんだよ。こんなとこ町の連中に見られたら、川向こうまで笑いもんだ」

膝をついて前かがみになると、下帯のない股が裾の中で開いた。冷えた風が裂け目を撫で、宝石がきゅっと縮む。

「燧」

扉の隙間から声がした。すぐ向こうに、瑛嗣がいる。

「っ、ぐ……てめ、え、今、呼ぶな……っ」

「次は奥の芯をもう少し深くしておく」

「知らねえよ……っ、もう、来ねえ、って……言ってん、だろ」

石が跳ね、針が鍵穴の中で逸れた。燧は震える指で針を送り直し、奥の芯をゆっくり押し戻した。扉の向こうで瑛嗣が息を吐くと、それだけで股から腿へ、ぬるいものが一筋垂れた。

芯がかちりと落ちた。

錠は、燧が来る前と同じに掛かった。

「掛けたぞ。これで誰も入れねえ。……満足かよ。言っとくけどな。夜ごと忍び込んでくるような真似はしねえからな。今夜限りだ」

「ああ。掛ける音は開ける音より静かだな。いい晩だ」

「音で分かんなら、分かんだろ。俺がどんな格好で錠いじってたか。下帯取り上げやがって……股丸出しで膝ついてんだぞ、こっちは」

扉の向こうで、瑛嗣が笑った。股の石がまた熱を打って、燧は扉に額を付けたまま、しばらく膝をついていた。

回廊は帰りのほうがつらかった。

扉の外の金色の糸をまたぐと、裾が割れて股に夜気が入った。針の穴の前は腕を胸に付けて抜けた。沈む石の並びでは、爪先で縁を叩いて音を聞くあいだに、まん汁が腿の内側を伝って踝まで落ちてきた。

踝の糸の下を腹ばいでくぐると、衣の裾がめくれて、まんこがじかに床の石に付いた。冷たい石が噴いたばかりの肉にぺたりと吸いつく。燧は歯を食いしばって、肘で前へ這った。股が石をこすって、ぬるぬると跡を引いた。

割れ目を出ると、東の空の端が白みかけていた。

燧は片手で裾の前を押さえて、山道を降りた。押さえた手の下で、宝石が布越しに掌に

当たる。手を離せば、風で裾がめくれる。燧は手を離さずに、坂を降りきった。

隠れ家に着くと、燧はかんぬきを落として、そのまま布団に倒れこんだ。衣の裾が腿の上までめくれても、直さなかった。股の石は、布団の中でも温かい。

目を閉じると、すぐに眠りが来た。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名　盗賊、竜人の宝物庫でクリに呪いの宝石を嵌められてカントにされ、夜ごと忍び込んで潮を噴き、二つ目を自分で嵌める

サークル　もふもふといっしょ！

発行日　2026・10・24

レーティング　R18